

令和3年度 第1回
寒河江市総合教育会議
会 議 録

令和3年11月8日 開会

令和3年11月8日（月曜日） 令和3年度 第1回寒河江市総合教育会議

○ 会議出席者

寒河江市長	佐藤洋樹		
寒河江市教育長	軽部賢		
寒河江市教育委員	鈴木淳一	國井晴彦	
	高橋まり子	鈴木多鶴子	

○ 事務局職員の職氏名

総務課長	設楽伸子	総務課課長補佐	小関光彦
学校教育課長	佐藤肇	指導推進室長	大竹純
スポーツ振興課長	小泉尚		
学校教育課課長補佐	佐藤芳朗	指導推進室長補佐	鈴木雅寿
生涯学習課課長補佐	佐藤陽一	スポーツ振興課長補佐	笹原泰治

○ 日程

令和3年度 第1回総合教育会議日程
令和3年11月8日（月曜日）

午後3時30分 開議
寒河江市立図書館2階会議室

1 開会

2 あいさつ

3 協議

(1) アフターコロナの学校対応について

(2) (仮称)「さがえ未来コンソーシアム」の構想について

4 その他

5 閉会

1 開 会 午後3時30分

2 あいさつ (佐藤洋樹市長)

3 協 議 (座長：佐藤洋樹市長)

(1) アフターコロナの学校対応について

○佐藤洋樹市長

それでは次第に従って進めてまいりたいと思います。(1)アフターコロナの学校対応について、まず指導推進室長の方から、その趣旨など資料に基づいて説明をお願いして議論に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。

○大竹純指導推進室長

アフターコロナに関する様々な話は出ている訳ですが、国から示されているものの中で、最新版というか、新しい方かと思ひまして、実は9月の閣議で解散する方向になった訳ですが、教育再生実行会議というのがありまして、その最後の第十二次の提言の中に、「ポストコロナ期における新たな学びのあり方について」という提言がございましたので、その項目に沿って本市の状況、それから課題等々についてご説明申し上げたいと思います。

「ニューノーマルにおける初等中等教育の姿と実現のための方策」というのが提言の中にごございました。ニューノーマル、「戻る」という話がありましたけれども、社会に大きな変化が起こって、コロナに関わらず変化が起こる前には戻ることが出来なくて、新たな常識が定着する、そんな時代における初等中等教育の姿と実現のための方策ということで提言されておりました。

初めに、一人一台端末の本格運用に係る環境整備について提言がございます。提言の中身につきましては、四角で囲んであるものでございます。まず、端末の持ち帰りを含めて安全安心に端末を取り扱う方法に関する手引きを策定して保護者への周知をはじめ、様々な低所得者世帯向けの通信を支援する云々、具体的なものまで踏み込んでありますけれども、本市の現状としましては、県内でも先頭を走っているものと自負しております。

まず端末の家庭への持ち帰りというものも、寒河江市が先立って行っている事でありまして。また一部の学校では、これまで実際に教員が動いて、対面で行っていた家庭訪問や個別面談をオンラインで実施するなど、コロナを意識した活動を実施しているところであります。

それから、就学援助という部分の所につきましては、新たにオンライン学習通信費というものを追加して、先ほど申し上げた通信費を支援するというを具体的に動き出しているというのが本市の現状であります。今後この環境整備についての課題としまして、◎に書かせていただきました。現在のタブレットは市で買い取って、それを貸与しているという形になる訳ですが、耐用年数等々のことで、これが次の段階に行かなければならなくなった場合、どのように設計するかということであります。BYODと書かせていただきましたが、「Bring Your Own Device」、個人の端末を学校に持ち込んで授業に活用するという方法のことも含めて、どのように今後策定していけばいいのかなというのが課題だと思われま。

二つ目は「データ駆動型の教育への転換による学びの変革の推進」というテーマでございました。児童生徒に関するデータや教師の指導・支援のデータ、それから学校・自治体に関する行政データなど、様々な膨大なデータが集積されてくると、それをどのように効果的に活用していくかというようなこと、それから令和6年度からデジタル教科書というものが使用されるようになって、その検証を踏まえて、どのような形にしていくのかについて述べられておりました。本市ではそのデジタル教科書に関する実証事業に、小学校9校中6校、中学校3校中2校が参加しているところであります。それから、クラウド型の総合学習ソフト「ミライシード」を活用しております。授業や自宅でそれを使って学習すると、その記録が自動的に蓄積されていくというシステムになっています。児童生徒の課題解決に向けて、自らのペースで取り組める問題集の活用がどの学校でも今進んでいるところであります。

提言の三つ目のところに、下から二行目、「個別最適な学び」というのが、まさに今申し上げたところでありますが、「協働的な学び」と両方推進していくという上では、寒河江市内の学校各教室に電子黒板はまだ配置されておられません。こういった電子黒板全学級配置を促進することが「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両立させていく上では急務だと考えているところであります。データにつきましては先ほども申し上げた通り、教師がどのように活用するかが課題になるのではないかなと思っているところです。

三つ目、「学びの継続・保障のための方策」としまして、ここに三つ提言がありますが、本市では保健室登校をしている児童生徒、それから学校には行けない児童生徒につきましては、授業を配信してその場所からその授業に参加することができるというようなシステムで動いている学校が非常に増えてまいりました。それから特別支援のお子さんにとっては、このタブレットというのは非常に有用なツールでありまして、読み仮名にルビがふってあったり、あるいは文字の大きさを大きくしたり、読み上げ機能が付いていたりということで、非常に使いやすい・学びやすいツールということで教科学習に取り組んでおります。

四つ目、「学びの多様化」ということで申し上げます。ここに書いてある学習の遅れの見られる児童生徒には、より重点的な指導を行ったり云々、というところを提言されております。先ほど申し上げたところとも絡みますけれども、併せて本市では日本語指導の必要な子どもに対して、自動翻訳機を使用することでコミュニケーションの向上が図られております。なお、外国から来た子どもたちだけでなく、本市児童生徒が抱えるそれぞれの課題に対応するために、今は「ミライシード」というアプリケーションのみ使用している訳ですけれども、もっと他にも様々なアプリケーションが今後開発されてくるものと思われまます。そういった場合、追加していくための予算措置があればいいなと考えているところであります。今現在、新型コロナウイルス感染症対策として各学校でとっている手立て、それから本市で予算を付けて新たに工事したものも含めてここに書いてある通りでございます。

○佐藤洋樹市長

四点ということですかね、説明頂きましたが、皆様からご質問含めてお話しいただきたいと思っております。

○鈴木淳一委員

本日はお疲れ様でございます。今室長からご説明あった全てだと思います。我々もですね、今年度学校訪問で全小中学校を回るということで、色々訪問した中での感想や感じたことはですね、やはりタブレット学習の始まりなのかなと思ったことです。様々な変化が起こった訳で、マスク・手洗い・消毒・検温など、ソーシャルディスタンスなんかも当たり前の状態になりましたけど、その中で子どもたちは、ふれあいも出来なくなったというか、ストレスを感じる子どももいるんだということを校長先生からお聞きして、驚きを感じるがありました。しかし、そんな状態でも時代は止まらないんで、このようなデジタル社会やAIなども変化しながら進んでいくんだなと思います。そんな中での学習時間というのは、校長先生がすごく悩んでいるというのをお聞きしました。コロナで学級閉鎖も行ったし、出席停止に追い込まれて学習の遅れる子もあったということ、また、コロナが広がり始める時には、時差式の登校などをして、休ませないで取り組んだという点が大きなことだったなと思います。また、配布されたタブレットでリモート学習に取り組んだ学校もあったようで、先ほど説明あった家庭訪問をオンラインで実施したということなどは、素晴らしい取り組みをしているんだなと思ったところでした。でも、子どもたちは時間の大切さって、まだまだ分からないんじゃないかなと思います。休みだといって喜んでる子どももいるようですし、時間の大切さというか、あつという間に大人になるんだということを教えていかなければいけないんだなというふうに思いました。そして、これからの社会が求めるのは豊かな人間力なんだということを新聞で見ました。学歴の社会から学習歴社会に変わっていくと書かれていて、いろんな事に興味を持つために、いろんなものを調べる力を持つことが大切だということが書かれておりました。そういった中でありがたいことに、寒河江市ではタブレットの端末を配布して、さらに家庭に持ち帰って使えるという、他の市町村と違った最先端を走る動きをしているということで、子どもたちが家でも調べものだったり、いろんなことに使えるということで、大変ありがたいなと感じました。タブレットなんですけど、学習面だけではなくて、今後自分の書いた絵とか習字とか、9年間保存に使ったり、作文とか、可能であれば通信簿とか個人情報のもその中に取り込むような動きになっていくとすると、クラウド上に保存ができないことを考えると、先ほど、「これからタブレットは市で貸すのではなくて個人の持ち物にしてはどうかという考えも必要だ」というお話もあった通り、中三から高校に上がる時にパソコンが無いなんていう時代は考えられないと思います。その辺もこれから考えなければならぬなと思いました。先生方も、タブレットについていろいろ研修会などしているという話も聞いたんですけど、電子黒板が各教室に一台ずつないということで、使える頻度が各学校によって違いがあるようなので、できるだけ早くクラスに一台設置をお願いしていただければと思いました。

アフターコロナに関して、蛇口も自動水栓にいただきましたし、トイレもすごくきれいにいただきました。何と言っても、エアコンも各教室に一台ずつ付けていただいたので、寒河江市の学校でのコロナ対応は、ものすごいスピードがあるなと感じた次第でした。

○佐藤洋樹市長

ありがとうございます。次、高橋委員ご意見をお願いします。

○高橋まり子委員

このアフターコロナの学校対応については、この資料にある通り、現状の把握や課題の提示な

んかは本当に書いてある通りだと思います。私はこれを踏まえての自分自身の感想なんですけど、このコロナが始まる前から来ているICTの活用とか社会のデジタル化というのは、コロナになってから一層進んでいて、コロナが終わっても逆戻りしていくことはないと思っています。ICTの重要さというか、それが非常に増してくると思うのですが、それにあってアナログ的な体験をもっともっと大事にしてもらいたいなと感じています。私、音楽が仕事なんですけれども、音楽の業界でも、今までアナログ的な使い方をすごく大事にしてきた、特にクラシックの業界でも、演奏活動についてICTを使った活動が今非常に増えてきています。例えば、今年ショパンコンクールというものがあって、世界の三大コンクールと呼ばれる素晴らしいコンクールなんですけど、今まではマニアの中での大事なものだだったのが、オンラインで開催されるようになって、これは一年以上かかるコンクールなんですけども、それが全てオンラインで全世界にライブ配信されるということが、本当に初めて取り組まれて、全世界からその場で見るができる、誰々推しみたいなフィーバーまでなっていて、非常にライブ感があって、現象になったのですけれども、そういったオリンピックだけではなくて、音で触れなければいけないような文化的な芸術的な分野まで、世界の最高水準のものが身近に簡単に触れられるようになってきているというのがあります。コロナ禍で子どもたちの合唱コンクールですとか、吹奏楽ですとか、あとはソロの分野でのコンクールなんかもオンラインで開催されるようになって、そのオンラインのウエイトも非常に大きいなという風に感じています。ただそれを最大限に利用するために、いきなり高水準なものをぱっと見て得られるものと、原体験の中に生で体験している、実際触れている・音を感じる・目で見る・同じ肌で触れる・空気で感じるといったような生の体験があってこそオンラインで出てくる情報がより深く想像しながら感じられる分野があるのではないかなというふうに非常に思っています。学校の現場でもぜひそういう音を聞く・見る・触れる・五感で感じる、そばに他者が実際にそばにいて、いろいろな体験ができる・話し合うことができるというような活動が、このICTが進んでいく社会の中でもっともっと大事になっていくのではないかなというふうに思っているところです。それが普通の授業の中でも特別授業の中でも、学校行事の中でもいろんな形でもっと大事にしていけたらいいなというふうに思っています。フリースクールの先生がおっしゃっていたんですけれども、「学校の役割は勉強とコミュニティだ」とおっしゃっていました。勉強面でのことはある程度、いま推進されているICTやそういったことで効果が得られるけれども、コミュニティに関してはやはり学校の役割は非常に大きいと。直接的でも間接的でもやっぱり人と触れあうことでなければ学べないことがたくさんあって、コミュニケーションを取ることが苦手な子ですとか、集団の場に行くことが困難な状況の子どもにとっての居場所ですとか、学ぶ場というのをちゃんと考えていかなければいけないのではないかなと思います。そのツールとして、ICTがこのようになってきているのは、非常に有効に使えるとも思えるのですけれども、もっと大きな枠組みとして学校のあり方、学び方の多様性というのも自治体として考えていってもいいのではないかなというふうに思いました。現在そういう子への対応としては、保健室登校・別室登校・寒陵スクールのようなものが提示されていますけれども、そこにも通えないような子どもたちが、今フリースクールと呼ばれるものが全国的にたくさんどんどん広がって出てきているのですけれど、そのフリースクールは自費で賄われていて、ボランティアに頼っているところもかなりありまして、社会的な認知というか学校に行けないみたいな、そういったことも、もっとこの社会の多様化に合わせて同じレベルに引き上げていくためにも、自治体とし

て自治体の方からできるアプローチがあるのではないかというふうに思っています。あと、これはただの提案なんですけれども、今学校で人数による違いが、特に中学校であると思うんですけれども、合唱コンクールを見させていただいたんですが、学年によるクラスの数にすごく違いがあるので、学年別の市の中学校の合同の合唱コンクールですとかが開催できると、例えば一学年クラスが少ない陵西中ですとかは、非常にモチベーションが上がっていろいろな刺激を受けられるのではないかなと思いました。なので、合唱だけではなくて美術ですとか、書道ですとか、そういう文科系の部活・活動に対するものを中学校区切らずに、全市としての合同的な文化祭的なものが出来ると横が広がっていくかなというふうに思いました。

○佐藤洋樹市長

ありがとうございます。では、鈴木委員、お願いします。

○鈴木多鶴子委員

国のGIGAスクール構想を受けて、寒河江市では昨年2020年度から市内の全小中学校にタブレットを一人一台ずつ配備し、家庭での無線LAN整備も整えました。この寒河江市の早い整備によりコロナ禍の今年度は、オンライン授業や連絡などで有効に活用できたという学校の事例を聞いております。学校訪問でも、タブレットを使った授業の様子を見せていただき、先生方の努力や試行錯誤の様子も見ていただきました。学校ごとにデジタル推進担当の若手教員が中心となり、有効な活用の取組みを広げようとする動きも見てとれました。私たちも、昨年度の総合教育会議にてタブレットの説明を受け、実際に操作をさせていただいたので、もっとこうした方が良いのではないかと、こういった場面で活用した方がいいのではというような場面も、見受けられました。活用場面や活用方法としては、研修会なども設けているようですので、今後どんどん進化していくものと期待しているところです。

タブレットの活用に当たっては、学習進度に合わせた一対一対応や、興味の喚起で一人一人を最大限に伸ばす教育が今以上にできるのではないかと考えています。資料の中では、子どもたちの学びをファシリテートしていくという表現で書いてありましたが、まさにこれからはデータとかデジタルを使って、学びをファシリテートしていくことも可能になっていくのだろうと思います。また、タブレット活用はこれからの探究型学習を進める上でも必要なものと思います。日本の子どもたちは自尊心が低いといわれています。寒河江市の学校でも学校訪問の時に自尊心の話題が出ました。「自尊心を高めるためにはどう取り組みますか」と聞いたところ、「褒めて認める。」と校長先生はお答えになりましたが、私はずっと違和感を持っていました。何が足りないのか、それは、自ら考え行動し、それを認められるということが必要なんだと気づきました。そのためには、自ら考え行動できる授業・学校にしていかなければなりません。探究型学習では、こういった力を醸成できるものと考えます。根底には一人ひとりが価値のある存在として尊重されていると思えていることも忘れてはいけない大切な事だと思えます。

最近また寒河江市でも不登校の数が増えてきているようです。対策をどうしていくかにあたって、中学時代不登校だった生徒から託された要望を紹介したいと思います。今年の春中学校を卒業して高校に旅立つときに託されたもので、自分の体験と不登校になっている中学生の妹の状況のことも色々考えてたどり着いたもののようです。それは「中学校も通信教育を作ってください」

ということでした。「一度中学校に行けなくなると、思春期でもあり人からどう思われているのが物凄く気になって、学校に行けなくなるんだ」ということでした。今回の教育再生実行会議の提言を読んで、これからの学びとして不登校児童生徒の多様な学び・個別最適な学びとして、タブレット学習を取り入れて通信教育的なものにしていけないのではないかと私は思ったところです。タブレットを使って不登校児童生徒の前向きな学びを進めていけないのではと期待しているところです。

タブレット使用については注意しなければならないこともあります。一つはネットのモラル教育です。二つ目がタブレットに頼らず、実体験や紙媒体での読み書きの大切さも忘れないで使っていかなければならないということです。二つ目については、言語脳科学者などの研究なども参考にしながら、子どもたちが健やかに発達していけるように考えていかなければいけないと感じています。

最後にですが、教育再生実行会議の中で、「教師が全ての業務を行うという発想から、校長の下に多様なスタッフが専門性を活かしつつ協働して学校を運営する事の転換が必要です」とあり、私も以前からそれを感じているところです。特に主任児童委員として、児童福祉の方にも関わっていますので、そこに挙げられているスクールソーシャルワーカーの必要性を幾度となく感じています。寒河江市ではスクールカウンセラーやコミュニティスクールの導入などで、新たな学びの取組みも進んでいますが、スクールソーシャルワーカーがまだ配置されていません。二年ほど前もこの総合教育会議で必要性を話させていただきましたが、先日も新たに必要性を感じた案件がありましたのでお話をさせていただきます。

先日地域の方からの「虐待に近いのではないか」という心配な情報で、主任児童委員として中学校や市の子育て推進課の家庭相談員、兄弟のいる小学校とそれぞれ情報を共有しました。その中で、不登校の子どもと家庭での心配な状況が浮かび上がりました。子どもの事を考えると、もう少し踏み込んだ対応をとも思いますが、主任児童委員としては限度があります。気軽にサポートを求められる社会にしていくことと、専門的な立場で学校や行政機関、さらには民間機関にもつながられる中心となって動いていくスクールソーシャルワーカーが必要だと強く感じました。その子どもの置かれている状況を考えると、本当に心が痛みます。誰一人取り残さない、多方面からのアプローチができるスクールソーシャルワーカーが寒河江市にもまずは一人でもよいので必要だなと感じました。昨年の市の教育振興計画策定委員会でも、ある校長先生から要望が出たと記憶しています。

○佐藤洋樹市長

では、國井委員、お願いします。

○國井晴彦委員

よろしく申し上げます。三人の委員の方からいろんな意見が出ました、だぶる所もあるんですが述べさせていただきます。

タブレット学習で、タブレットを早期に最初に入れたということで、トップランナーを自負していますということ文章がありました。全くその通りだと思います。タブレットを入れることによって、ちょっとオーバーな話ですけれども、明治維新並みにどんどん変わってくるんじゃない

かと思えます。ただし、大河ドラマでもあるように、必ず反対勢力といいますか、また江戸時代に戻りたいという人もかなりいると思えますので、この10カ月くらいが、なんといいですか、学校訪問をさせていただきますと、若手の先生方は積極的に取り入れて子どもたちと楽しくやっている。ベテランの先生方は、タブレットは煙たいというような雰囲気、私だけじゃなく感じられるんじゃないかというふうに思います。何かの教育委員会の会議でも申し上げさせていただいたんですけども、先生というのは我々の業界でいうと、職人氣質的な所があって、「自分はこのやり方でずっと子どもたちを育ててきた。このやり方で子どもたちの点数を上げてきた。素晴らしい学校にしてきた」という自負がありますので、文明の利器みたいなものを入れたからといって、すぐそれに変えられるかという、「鉛筆とノートと黒板が最高なんだ、俺の授業をよく聞け」という先生が、特に中学校を中心にかなりいらっしゃるんじゃないかなと思います。タブレットが全て万能だというふうには思いませんが、やはり総合的に、先ほど事務局より説明ありましたように、ただタブレットを使っている授業が出来るだけじゃなくて、家でも復習ができる、あと先生方が子どもたちの成績等、生活とかを管理できる、そういう総合的な面をみてもですね、これからのICT教育並びに人工知能とかの発展を考えると、これにいち早く乗ってさらに進めていくのが将来の子どもたちにとって素晴らしいことなんじゃないかなと思います。私も教育委員二期目なんですが、それまでは、あまり新聞で教育関係の記事とか読まなかったんですが、最近日本経済新聞に「教育岩盤」という記事が5回ほど連載になりまして、興味深く読ませていただきました。やはり今までは、運動会の行進のように同じ整列を組んで同じことをやって、遅れた子どもはまた別な学級へ行って、補習とかあるかもしれませんが、逆に列を乱して先頭に行っただめだと、そういう形で同じ列でいってるんですが、それが今まで20年30年前まではよかったです。そういう事をしていて、ここ2、30年間日本人の給料は全く上がってないと、世界に取り残されているというのがありました。それも全く教育とは無縁じゃないんじゃないかというふうに思っております。やはり寒河江市ももちろんそうですが、日本の経済的なものをさらに成長させていって、日本人がいきいき暮らすためにも世界の教育に遅れるということは許されないと思えますので、タブレットをフルに使って、先生方の気持ちをもう一回タブレットで再認識して頑張ってもらいたいなというふうに思っています。どうしてもタブレットを使うことによって成績といいますか、差が広がってくると思うんですね。もちろん学習の苦手な子どもは、補習等いろんな仕組みの中で救っていかねばなりません。逆にどんどん上にいく子どもも出てくると思います。そういう子たちは飛び級等の思い切った措置で、どんどん伸ばしていくような仕組みも考えていっていただきたいなと思います。働き方改革の中で、先生を志望する人が減って、採用試験の競争倍率も落ちているというのも聞いております。もちろん働き方改革等でさらに環境を良くして、先生を志す人を増やしていただいて、その中にある程度若い人じゃないと、これからのICTの教育は難しいと思えますので、そういう人をどんどん増やしていただきたいと思えます。また一般企業でも、最近平均寿命が延びている関係で60歳以上、働く方は70歳位まで働く方が増えています。そういう方々も再任用制度があるというふうに聞いたので、再任用の時はICT教育をしっかり理解して子どもたちに教えられる能力、研修をしてから再任用していただくように、そういう仕組みを考えていただきたいなと思います。あと、学校の先生というのは、「先生」と呼ばれて、どうしても一つ上のランクにいる方ですけども、どうしてもその方がプライドが強いのは当然だと思いますけれども、タブレットというのが

出て、タブレットが先生で、教師が脇役でもいいんじゃないかなと、間に立つ役割でも、そういう役割も出来る先生になってもらいたいと思った次第です。

○佐藤洋樹市長

ありがとうございます。では、教育長。

○軽部賢教育長

タブレットについては、だいぶ評価をしていただいていますけど、昨年の総合教育会議の時に、皆さんへ「このようなコンセプトで、スケジュール感でやっています」ということをお話させていただいて、2月から学校に導入いたしました。色々ありましたけど、やはり「研修が出来ていないからまだ早いんだ」とか、「持ち帰ってなかなか家庭で使わせるのが心配だ」とか、不安の声もありましたけど、とにかく使っていくことで課題も見えてきて、そして解決していくというようなことを、校長会でもお話させていただいたし、GIGAスクール構想のいろんな研修会とか、担当者会などでも促進するように働きかけて、先ほど委員の皆さんからあったような効果はみられているのだろーと思います。ただやはり、まだまだ学校間あるいは教師間で格差があるというのは事実ですけども、とにかくこちらとしても、使用頻度であるとか、活用の度合いなど、情報収集して、そしていいものを発信して使っていただくようにしています。子どもたちの様子を見ると、低学年からキーボードを触ったり、自然な感じで子どもたちがIDを入れてパスワードを入れているような状況があって、先生方が心配する以上に、子どもたちはどんどん文房具のように使っているという状況にあるな、というふうに思います。先ほど「県内のトップランナー」という話がありましたけども、「寒河江市でなぜ持ち帰りがこうやって可能になっているのか」とか、様々他の自治体からも問い合わせがあったり、県の教育委員会からも「他の自治体が進まないの、寒河江市の例を参考にして発信したい」ということで、学校視察に来ていただいている訳ですけども、やはり家庭に持ち帰った時に、家庭でしっかりルールを守って下さいとか、フィルタリングソフトを入れて、一定の時刻になると、そこからはインターネットにつなげないようにしたり、それから「持ち帰って壊れても、動産保険に入っているから心配ないんだよ」という安心材料とか、家庭に持ち帰っても、家庭学習で役立つドリルができるソフトを入れているとか、そういったことが促進されています。あとは教育委員会の指導係だけではなくて、総務も学事も一体となって子どもたちの教育、学びのために何が必要かということで、これを導入する段階からしっかりとコンセプトや方針を一つにして取り組んだということがあるかと思います。もちろん財政の方でも、だいぶ支援していただいているということもあって、先ほどのフィルタリングのソフトであるとか、動産保険、アプリケーションであるとか、そのようなものは他の自治体でも参考にしていて、なかなか国内で進まない自治体があるのに対して、何とかしなければという思いがある中で、寒河江市の取組みを参考にしようとしている自治体はあるようで、「夏以降入れます」とか、あるいは「今年度中に入れます」という中で、寒河江市が一番最初に走っているというような状況です。これからはコンピュータで出来るところはコンピュータに任せて、例えば丸付け採点業務なんかは先生の仕事から手が離れるだろうし、ただ教えるだけの教育だけではなくて、子どもたち同士の意見を上手くファシリテートする、あるいは子どもたちのいろんな学びを多面的に評価するとか、そのような「教える」というよりもコーディネートしていく、あ

るいは多面的に評価して、さらにそれをつなげていくという教育のあり方そのものが変わってくるんじゃないかなって思っているところです。そういう意味では若い先生方が積極的にやっているということは、これからの教員人生が長い先生方がそのような取り組みをしていくということは、教育の先も明るいのではないかなと思いつつ、今年度の採用試験の倍率を見ると小学校は1.5倍で去年の1.7倍よりもさらに下がっている。中学校でも去年の2.4倍からも2.1倍に下がっているという、先生を目指す若者が減っているというのは寂しいなと思うんですけど、やりがいのある仕事だということや、子どもたちと活き活きと教育をやっている姿をもっともっと市民の方とか、これから成長していく子どもたちなどにも「先生は面白いやりがいのある仕事なんだ」ということを、学校の場で見せていくということは必要なんだなというふうに思っているところです。

あと、先ほど申し上げました、県教育委員会の視察で注目していたのは、教室に入れないけれども、保健室でタブレットを通して教室の様子を見て、教室に「入れる」「入れない」を判断して、教室に行く頃合いを確認しているとか、教室に入れなくて、別室で授業している子どもたちが、タブレットを通して教室の様子を見て、「これなら次は行けそうだな」というような、不登校あるいは、登校渋りの子どもたちにとっても有効なツールなんだということを、評価していただいているので、不登校の担当者会でも、学校に来られない子どもにもしっかりと授業を配信していくとか、積極的にやっていただくようお願いをしているところです。

先ほどスクールソーシャルワーカーのお話がありました。学校と福祉をつなぐ役目、コーディネートしてくれる方というのが、非常に必要だというのはずっと私も考えていて、県の教育委員会に勤めていた時に、この配置を要望して、その段階から県内四地区に一人ずつ配置されています。ただ、村山教育事務所に一人配置された時に、順番で寒河江市にも二年間か三年間入った時があるんですけど、それは県費で入っているんですけども、まあ残念ながら市では入れてないといえますか、これを入れる時もそもそもこういう大事な役割だということは非常に承知していて重要な役割だと、必要感是非常に認識していたんですけど、出来る方がなかなかいないと。福祉が専門だけど教育が分からない、教育は専門だけども福祉の事が分からないという、その両方分かる専門家というのはなかなか居ない。県内で何人かしかいないので、こういう方をこれから養成していくとか、目指す方を大事にして育てて配置していくということがこれから必要なかなと思っています。ですからこういった仕事は、今は指導推進室の指導主事が福祉と連携しながら、教育と福祉を緊密に連携しながら対応しているということですが、さきほど鈴木委員からあったようにこういうスーパーバイザー的な方がいると、一人で二役出来る方が居ればもっと有効に働くことができるんだろうなと思います。これはこれからの課題かなというふうに思っております。

また、不登校の子どもについては、今年は、去年の同時期から見ると少し増えているというのはあるかもしれませんが、昨年度の文科省の調査でいじめと不登校の件数といえますか、発表されましたけども、これまでずっと寒河江市の不登校の出現率が県より上回っている状況がありましたけども、昨年はそれを下回ったんですね。それはやはり、教育相談員を増やしたり、教育相談員が学校に足しげく行ったり、学校の先生方と連携を取ったりして、そういう成果が出てきたと思っていますので、これからも一人一人の子どもたちの実態をしっかりと把握しながら、その支援を一緒になってやっていくということが必要だというふうに思っているところであります。

あとは、鈴木委員からあった、「子どもたちが取り組んだ学習の履歴を保存していくというよう

なことが大事だ」とありましたけれども、県の予算要求の中に県立高校のタブレットの予算要求に7億円盛り込むようなことが出ていたんですけども、小中高がタブレットを使う様な環境になってくると、小学校で作った作品、今子どもたちは自分で、色々取り組んだことを、「キャリアパスポート」といってアナログで書くことになっているんですけども、それをデジタルでクラウド上に溜めていって、小学校から中学校、中学校から高校といくと、それが自分の学びの履歴になっていくということができるようになるんじゃないかなと思うので、そういうようなことも一つ取り組むことが大事かなと思います。それは市町村教育委員会と県教育委員会がどういうふうに連携していくかということにもなると思うのですが、先ほど提案があったような、しっかり自分の学びを記録しておいて振り返ってみたり、あるいは教師側もそれを評価の材料に使っていくということは大事な視点かなというふうに思ったところです。

○佐藤洋樹市長

さっき鈴木淳一委員からあった、タブレットは貸している訳ですけど、ずっと貸している訳ですよ。

○軽部賢教育長

寒河江は買い取りしているの。

○佐藤洋樹市長

子どもたちには貸している訳でしょ。

○軽部賢教育長

買い取ったものを貸しています。

○佐藤洋樹市長

貸している訳ですよ。今の中学三年生はどうするんですか。

○軽部教育長

下に下ろしていきます。

○佐藤洋樹市長

同じものを使い回すんですか、あげる訳ではなくて。ということは、それは中学1年生に。小学校6年生が卒業すると、それが小学校1年生に。中学校と小学校は機械のグレードは違うんですかね。

○佐藤肇学校教育課長

ハードは全部同じです。小学校中学校一緒です。

○佐藤洋樹市長

中学校に持っていけるという訳にはならないんですね。

○佐藤肇学校教育課長

基本的には学校の中で使い回しというふうに考えております。耐用年数が5年ということになっておりますので、国の方でも5年後どういう風になるかというのは検討なるかとは思いますが、中学校ですと3年でローリング、小学校だと1回りするのに、6年間かかるんですけれども、その中で5年の取り扱いをどうするかというのは、今後の検討になってくるかと思いません。

○佐藤洋樹市長

組織的には6年間使うんですね。1年生の時に新しいものを使う訳ではないということになる訳ですね。

○佐藤肇学校教育課長

ですから、今回は一斉に購入しましたけれども、1年ごとに学年ごとに一年ずつしていけばいいのかなというふうには考えています。

○佐藤洋樹市長

今度の1年生には、新しいものが来る訳ではないのか。使い古しのがくる訳。だんだん古くなったやつが1年生にいくと。それも可哀想だね。1年生くらい新しいのを。

それから、フリースクールのが、高橋委員からありましたけれど、新しい取り組みとか、そういったことをしていかないと、なかなか実態が見えなくなってしまうということもあって、いかがなものかと思いますが、そういう活動をしている場所は市内にもあるんですか。

○高橋まり子委員

フリースクール的なものは、寒河江市にはないです。なので、やはり探して探していかないとないです。山形市にはありますが、県内では少ないと思います。

○鈴木多鶴子委員

山形市内は、知っているところで二カ所あって、一つの所には「寒河江市からも来ている人がいるよ」という担当者からの話を聞いています。寒河江市で現在フリースクールはないんですけども、そういうものが出来たら、関わりたいという人はいます。運営する方として関わりたい人です。

○佐藤洋樹市長

運営する人っていうのは、教えられるんだろうね。違うのか、教えない？子どもたちを寄せる？

○高橋まり子委員

いわゆる「授業する」という意味ではまたちょっと違う。居場所提供。

○鈴木多鶴子委員

フリースクールごとで違うんですけども、いろんな体験をすることをベースにしているところと、あと通ってくる子どもの興味に合わせて授業というか、勉強の時間を作ったり、自由な時間を作ったりということで、主任児童委員の研修でも、今まで三カ所ほどフリースクールの見学研修に行ったことがあるんですけども、それらは工夫しながらやっていました。

○佐藤洋樹市長

そういうのは、子どもに関して指導するのに資格は要らないの。

○鈴木多鶴子委員

そこまでは分かりませんが、教員の免許を持っている方もいれば、そうじゃない方もいます。

○佐藤洋樹市長

寒河江からも行っている人も、何人かいらっしゃるのかな。

○鈴木多鶴子委員

何人かまでは分かりませんが、「寒河江からも来てるよ」というのは聞いています。

○軽部賢教育長

それは小中学生が行っている？小中学生が行っているという情報はないのですが。

○鈴木多鶴子委員

困っているご家庭において、こういった「フリースクールが山形市にある」とか、「別な団体がある」とかいう情報がなかなか入らないので、そういった意味でもスクールソーシャルワーカーの方がいれば、寒河江市の学校だけでなく機関だけでなく、民間のところも紹介できるのになと思う所もあります。

○佐藤洋樹市長

ちょっとその辺を調べてみたらいいんじゃないでしょうか。

あと國井委員からもあった、どうですか、再任用で。

○軽部賢教育長

再任用制度そのものが、なかなか、やっぱり手を挙げた人が採用されるというものなんですね。だからさっき國井委員からあったように、価値観転換できないと、指導法の柔軟性がなくなってきたりとか課題はあるなと思ってはいます。採用のあり方とか、県の教育委員会あたりという議論する必要があると思っています。

○佐藤洋樹市長

学校の先生を希望する人がだんだん減ってるんですかね。そういうのは何が原因なのか、モニターペアレンツとか、大変だっていう意味なんですかね。

○軽部賢教育長

長時間勤務だとか、いろいろ対応しなければいけない課題が多いから、教育学部系の大学を出ても、そうじゃないところに就職を希望する人もけっこう出てきていますよね。

○佐藤洋樹市長

まあ、そういうのが理由だろうと。産婦人科と小児科を先生希望する人がいないのと違うんですね。要するに少子化で、将来的にという、将来性にとってどうかという理由ではないんですね。

○軽部賢教育長

巷で言われているのは、やっぱり「大変だ」「業務」とか「長時間勤務」についてですよ。そういうのが言われていますね。

○佐藤洋樹市長

なかなかいろいろ昔とだいぶ、サポートする人なんかも確保しているんだけどね。なかなかその傾向は進んでいますよね。給料が安いとか、そういうのもあるんだろうね、公務員なので。

○軽部賢教育長

少し高くなれば希望する人が増えるかもしれないですね。

○佐藤洋樹市長

はい、分かりました。いろいろありがとうございました。

それでは続いて、「さがえ未来コンソーシアム」の構想についてお願いしたいと思います。それでは学校教育課長お願いします。

○佐藤肇学校教育課長

それでは私の方からご説明申し上げます。

新第6次寒河江市振興計画の第1章第4節の施策5の中で、学校・家庭・地域が連携した教育の推進ということで、主な取組みの中で、「学校・企業・地域から構成される教育活動を推進するための組織設立の検討」という記載がございます。これを実現する組織として（仮称）「さがえ未来コンソーシアム」の構想について、ご協議いただきたいと考えております。

まずは現在の本市学校教育の状況を申し上げますと、コミュニティスクールを市内全ての学校に整備しており、地域に開かれた学校として学校運営を行っております。これまでも、キャリア教育、体験学習、学年行事など、地域の方々や企業等からの協力をいただいておりますが、コミュニティスクールの整備により、各学校の地域コーディネーターを中心にこれまでの活動に加えて、様々な学校運営にご協力をいただいております。しかしながら、子どもたちの資質・能力および態度の健全育成に資する事業を効果的に実施するには、市全体にわたり、学校・地域・企

業等の連携および協働は欠かせないものであり、同時にそれぞれが互いに Win-Win の関係を構築できるのであれば、本市の発展にも寄与するものでございます。そのため、こちらの資料の通り「さがえ未来コンソーシアム」として組織整備を現在検討しておりますが、皆様に事前の説明では法人化した会の運営ということでご説明申し上げましたけれども、その後、企業関係者とも検討し、まずは公的機関として教育委員会内に設置することで現在検討しております。この度は、こちらの資料に基づいて「さがえ未来コンソーシアム」についてご協議いただきたいと考えております、以上よろしくお願ひ申し上げます。

○佐藤洋樹市長

ちょっとボヤっとしているんですけど、今の課長の話だと、もったもで、悪い話ではないし「どうぞ進めてください」という感じがするんですけど、どうですか。

○國井晴彦委員

まだ構想の段階なので、やっぱり形も見えてこないんだと思うんですけども、もちろん教育という問題であり、地域とか企業というかその課題も色々あると思います。やっぱり地元の企業に関わらず、やはり今までだと、利益を上げるというか、金儲けするだけでなく、地域貢献、社会に貢献していかなくちゃならないというのも、我々もやっていかなくちゃなくなっております。一方で、どういうことが地域貢献になるのかというのも分からない段階で、寄付すればいいのかなとか、そういうこともあると思います。あと、私も P T A とかも関わってきましたんで、よく P T A の親子行事とか、学校で何か講演を聞きたいといった時に、そこに窓口となる人がなかなかいない。中部小学校や陵南中学校の場合は、多様な方々がいろいろいましたので、苦労しなかったんですが、やっぱり小規模の学校とか学校訪問すると、生徒数の少ないところは、そういう父兄の方も少ないし、そういう場合そういう窓口があるのは、おもしろいんじゃないかなというふうに思います。やっぱりこれからは、先ほどと、ちょっとだぶってしまうんですが、学校を卒業して、高校大学と行って、会社や就職しても 3 年以内に辞めてしまう人がかなりいる。やはり授業の他に、社会での体験をもっと増やしていくべきじゃないかと思います。昔は、アルバイトというのは、ある学校では禁止されていたり、生活に困っているということがあれば許されたりしたんですが、社会体験するには非常にいい機会だと思うんです。そういうのを、もうちょっと柔軟に、本当はちょっと違いますけど、そんな形も考えられると思いますし、とにかく社会と もっと接していくことが大事だというふうに思います。そういう中で、私の所属している寒河江ロータリークラブの話になるんですが、寒河江ロータリークラブで、昔から例えば、寒河江高校の農業校舎の就職面接の指導ですとか、最近ですと陵東中学校におじゃまして職業の講話、一番メインは高校生の 1 年間の海外派遣、あと短期で 1 週間位の小学校中学校の短期の派遣もやってきました。その中で体験した子どもたちは、いきいきとして人間的にも数段アップして帰ってくる子もいます。ただ、私もその担当委員会もやったことがあるんですが、5 年ぐらい前は非常に生徒を集めるのに苦労しました。学校を訪問して「こういうことで留学する人を集めているので、ポスターを貼ってほしい」とお願ひに行っても、「はい、分かりました、じゃあ貼っておきます。」とはいうものの、よくよく聞いたら貼ってもいないし、ポスターもどっかに捨てられているというような事がよくありましたので、それをこういう窓口があって、一括で P R していただければ、

もうちょっと留学とかで人生が変わる人もいたんじゃないかなと思うので、そういうところの窓口になっていただければな、と思います。また、これも宣伝になってしまうんですが、私が来年度の寒河江ロータリークラブの会長をやらせていただきますので、こちらの考えていることが、寒河江ロータリークラブでやってきた事業とかなり重なるところもありますので、ぜひその先駆けとして、うちの団体を使っただけならば、いろんな面白いことも考えられるんじゃないかなと思いますので、もちろん理事会は通さないと、それはなんとも言えませんが、ぜひ学校と企業とそういう団体、そして将来を担う寒河江市の子どもたちを育てていくという方向の中で、まずやってみるといふ部分では面白いんじゃないかなと思います、以上です。

○佐藤洋樹市長

ありがとうございます。では鈴木委員。

○鈴木多鶴子委員

「さがえ未来コンソーシアム」ということで、これを見せていただいた時に、これから探究型学習をしていく上でも、地域の企業や団体、学校との連携は、幅広い視点、専門的な視点での多面的な関わりが期待できるのではないかということ、とても良いことだなと思いました。この中の真ん中あたりにある、『「コドモシゴト」との連携』と書いてありますが、寒河江市商工会青年部の学校出張取組みの事だと思いましたが、この担当者からもいろいろ聞いています。仕事の実体験型であり、子どもにとってはとても重要なことだなと思いました。子どもが小さい頃から職場体験できる東京のキッズニアなどのそういったものの寒河江版として定着していければいいなというふうに思います。

あと資料の右の方にある、「放課後の学びについて」という事ですが、地域や学校ごとに地域探検とか、昔遊び、伝統行事、伝統食事、それから国際交流など様々な体験で地域の人たちと活動し、豊かな心を育んでもらえるのではないかなと思っています。

陵東中学校の方では一昨年度より、ボランティアを入れての木曜塾をスタートしております。昨年度、今年度あたりはコロナ禍により、あまり活動できない状況ではあると思いますけれども、その構想も、地域の方のいろんな取り組みを入れて幅広い活動を展開していく、というようなことを考えていたようでしたので、それも期待していることです。

あと上の段の「さがえ未来コンソーシアム」の事務局の方では、それぞれの団体の情報、それから可能性のデータベース役割や提案などを行って、それぞれの学校や地域にあった活用が出来るようになればいいなと思いました。私はロータリーの方に関わっているんですけども、こういった日本の事務局で出している冊子などもあるんですけども、ロータリーの方においても、地域社会のための活動や若い人たちを育てる様々な青少年育成プログラム、それから留学生との交流がありますので、連携する事によって子どもたちの広い学びにつながるかなと思っています。私も山形大学の大学院にいましたベナンの学生のサポートを夫と共に携わって、まだ山形の方にいるので、サポートしておりますが、そういった学生さんと小中学校の子どもとの交流とか、もちろん地元の中学校の方に留学生と共に訪問させていただいたこともあるんですけども、そういった気軽な交流にもつながれるのではないかなと思います。

こちらのテーマにおいても、子どもたちの多様な学びを考え自発的・主体的に関われるよう、

工夫しながら進めていってほしいなと思います。それが自尊感情・幸せ感・郷土愛・地域の発展にもつながるものと思います、以上です。

○佐藤洋樹市長

はい、ありがとうございます。では、高橋委員。

○高橋まり子委員

地域で学校を育てる、それによって地域も活性化していくということが、今非常に大事な事なんだと思うんですけども、もっと「地域」という名前の分母が広がればいいなという風に思いました。小学校の学校単位で見ても地域差というのがたくさんありますし、例えば幸生や醍醐の持っている伝統的な行事とか、そういったものも、その地区の子どもたちだけのものとするよりも、寒河江市全体の財産としてもっと共有できるような感覚になっていくといいなと思いました。「ふるさと」とか「地域」というものももっともっと広がっていくといいなと思っています。私はこれに関して、地域との関わり、学校との関わりがまだまだだなというふうに思っていて、もっともっとたくさん交流があればいいな、というふうに思っています。その一案として、前から思っていたんですけど、非常に乱暴な意見だと思うんですが、中学校の部活動について、もっと地域に思い切って、学校は勉強の学びの場だけで、放課後に関しては地域に移行ということが、非常に乱暴な意見ですけども、思い切ってそういった事ができれば、地域との連動という面でも、もっと活性化するのではないかなというふうに思いました。今子どもたちが放課後の時間に求めていることも、非常に多様性が出てきていますし、学校の部活とか学校の勉強以外に、時間をかけて取り組みたいものがある子ですとか、学校のコミュニティではないところで活動したい子どもさんですとか、いろんな面があると思います。また学ぶことに関して、趣味的な位置付けから専門的なものを高レベルで学びたいという子どもたちの学びも含めて、学校の部活だけでは収まりきれない状況も、生まれてきているのではないかなというふうに思っているところです。いろいろそれに関しては、問題が山積みで簡単な事ではないと思うのですが、この度の地域の団体と連動ということに併せて少し考えていってもいいかなというふうに思います。

○佐藤洋樹市長

はい、ありがとうございます。では、鈴木委員。

○鈴木淳一委員

私は、こういった組織の作り方って、別に抵抗を感じないんですね。軽部教育長が陵南時代に立ち上げました「陵南ブランド化構想」に似てるな、というふうに感じていました。ただ私共の年代、近くの友達とかにもお聞きしたんですけど、コミュニティスクールになったということ自体も分からなくて、認知されてないんだなということ、認知にはやっぱり時間がかかるし、ここ最近新しいカタカナ言葉が多すぎて、「ソーシャルディスタンス」なんかもようやく覚えたみたいな感じで、「コミュニティスクールは何なんだ」とか、「地域コミュニティって何だ」という方はまだまだいるんだなと思います。「SDGs」も、ここ最近認知されてきたようですけど、実は6年前からやっているんだというお話をお聞きして、やはりこういった文言が広まるには時間

がかかるんだな、というのがまず一点ありました。でもこういった事を「大事なことなんだ」と伝えと、地域の人理解してくれると思うんです。ただ理解に時間がかかって、足踏み、止まっているというのが現状じゃないかなと。自分から進んでいくまでには、まだまだ壁があるのですが、こういった中心的組織を作ってもらえれば、学校との関わりの中で、ワンクッションがあることで気軽に関わっていけるなと感じたところでした。あとこの絵ですが、前も言ったんですけど、丸いイメージだといいいのかなと思いました。どうしても組織の上のところは事務局があるのが、「違うんじゃないかな」というふうに見えるんですね。先ほど國井委員からもあったように、私も青年会議所時代に、青少年事業を立ち上げる時、どうしても学校との募集のバランスが取れなくて、50人も集められない事業ばかりやっていたな、ということが思い返されました。そういった、お互い希望するマッチングが上手くいかないようなことが、他の団体さんでもあったんじゃないかなというふうに思ったところでした。あと、先ほど部活動の事もあったんですけど、自分の娘のことで申し訳ないんですけど、「部活をやっていたおかげで高校に行けた」という親もいるので、学校から部活をなくしてしまうならば、「国がそういう方針だ」ということを早い段階から伝えていかないと、混乱が起きるのではないかなというふうに感じます。でも、そんなことをいっても、現に陵西中さんのソフトボール部の女子生徒が1名になって、来年度の新入生が入部しないとチームが組めなくなるという話をお聞きしているので、その辺、思い切った改革が必要なのかなと思います。学校のあり方の検討も進められているので、いろんな方向から考えを組み立てていくのが難しいことだなと思いました。あと、先ほどのタブレットの話の中で、モラル教育の話が出ていたので、この組織の協力団体に警察署の参加もお願いできればと思いました。以上です。

○佐藤洋樹市長

はい、時間もあれなので、私から質問というか。

これは、前にも聞いたのかもしれないですけど、誰が発想しているんですかね、こういう発想。どこかからの要望とかなんですかね。

それからコンソーシアムっていう、これは地域コーディネーター連絡協議会のことを指すんですか。

○軽部賢教育長

そうですね、最終的に独立した一般社団法人みたいなことも考えたんですけども、それは各企業の方からもいろいろご意見いただくと、独立させるのは、自立するのは難しいのではないかと。だから連絡協議会のような。

○佐藤洋樹市長

地域コーディネーターっていうのは、各学校に支援員がいる訳ですけども、その連絡協議会の役割を果たして、統括したコーディネーターを置いて、プラス、地域おこし協力隊も雇って、そこでそのコンソーシアムという形を作って、ここに書いてあるようなコーディネートをしていくと、こういう訳ですよ。

○軽部賢教育長

その発想というのは、コミュニティスクールが、今どんどん立ち上がってきている訳ですけども、コーディネーターの方が「自分の所は詳しいけど、他の地区でも素晴らしい取り組みをしているから、そういう情報が欲しい。そして、連携して市全体の取組みをうちの学校の子どもたちにもさせたいものだ」というコーディネーターさんの思いみたいなものはできているんですよ。そして、横の連携も必要だし、また学校でいろいろ総合学習なんかを組む時に、一からプログラムを組んでいく、カリキュラムを組んでいくというのはなかなか大変なので、そういうカリキュラムを作って、マネジメントをして引き出しをいっぱい持っているような組織があると、そこからいろいろとプログラムを出してあげられるんじゃないかなという、そういった組織があるといいなと思ったところなんです。学校側の理屈だけ言うとあれなんですけど、地域あるいは企業からの視点で言いますと、例えばライフデザインセミナーなんかやっていると、仕事を持った人が子どもたちの前で話をするなんていうと、「寝ないで頑張って勉強してきたんだ」という方もいっぱいいて、自分の仕事とか人生を振り返る機会にもなっているなと思っています。学校と企業はいろんな連携を図ると学校にもメリットがあるんだけど、企業にとっても自分のやってきたことの振り返り、プライドを持てる、そして子どもたちにそういう生き様を伝えられる場でもあるので、Win-Winの状態になっていけるんじゃないかなということで、こういうものをしっかりと作って、目に見えるような形で、さっき鈴木委員からあったみたいに、なかなか認知するのに時間がかかるのかもしれないけども、市の取組みとしてやっているんだとなれば、子どもたちにとっても、あるいは地域企業にとっても持続可能といいますか、発展するような事になるのかなと思っています。

○佐藤洋樹市長

これは寒河江独自の取組みということになるんですかね。

○軽部賢教育長

そうですね。コンソーシアム自体はいろいろ高校なんか「A I コンソーシアム」とかありますよね。ああいう風にして、昨日の新聞にも山形東高校で探究科が出来て、東大に3名入ったなんていうのは、学校だけの閉じた授業じゃなくて、企業とか地域とかどんどん絡みながらやってきたことが、子どもたちの主体的な学びといいますか、思考力・判断力を培ったんじゃないかと言われているので、寒河江でも小中学校の時代から、こういった教室だけじゃなくて、外に開いた教育をやることによって、子どもたちの力を伸ばすことができるんじゃないかなという風に思ったところでした。

○佐藤洋樹市長

これは、高校の方も絵が描いてありますが、ここはどういうことですか。

○軽部賢教育長

高校にも働きかけて、寒河江工業高校は、ものづくりなんかは今まで一緒にやってきているし、寒河江高校も探究学習なんかをやっているんで、そこをもう少し今までよりも緊密に連携してい

ければなと思って、校長先生方と話をしています。

○佐藤洋樹市長

分かりました。教育長の方から、もう一回まとめていただいて。今話をまとめていただいて結構ですから。

○鈴木多鶴子委員

一つお聞きしたいのは、この「さがえ未来コンソーシアム」というのはここに書いてある全体が「さがえ未来コンソーシアム」という風に私は捉えたんですが、連絡協議会が「さがえ未来コンソーシアム」ということになるんですか。

○軽部賢教育長

いろんな組織が連携したものが「コンソーシアム」って言っているの、ちょっとそこはしっかり考えていかなきゃいけないと思っていますが。

○佐藤洋樹市長

皆さんの方から何かありますか。これは来年度からこうやっていきたいという話ですかね。

○軽部賢教育長

そうですね、事務局に統括コーディネーターとかっていうふうに置くと考えると、当初予算で要求をしていきたいなと思っています。

○佐藤洋樹市長

地域コーディネーターって高校にもいるのですか。

○軽部賢教育長

いないですね。今の寒河江高校の校長先生が小国町にいた時は、町で小中高連携みたいになっているので、そこで小国では町で配置していたということなんですけど、県教育委員会では入れてないですね。推進はしていますけど。

○佐藤洋樹市長

小国高校に町で入れていたということですか。

○軽部賢教育長

小中高すべてをコーディネートするということで。市でコーディネーターを入れれば、高校のことも一緒にコーディネート統括しているということは出来ると思います。

○佐藤洋樹市長

みなさんから他に。なかなか法人化は難しいと、企業の方では。

○軽部賢教育長

そういうお話でした。例えば具体的に言えば、朝日町に佐藤恒平さんっています。ウサヒの人。あの人が一人で会社をやっていて、会社として経営できているんですが、それがコーディネーターみたいなことやってる訳ですけど、会社として成り立つことが出来る人がいれば、そうやって指定管理にして、こういう業務をできるんだと思いますが、今はそういう方が見当たらないので、将来そういう風な人、例えばコーディネーターしたり結びつけるようなことで、ある程度利益を上げられるような会社が出てくれば、そういうところに指定管理なんてできるんでしょうけど、今そういう方が想定できないので、まずは教育委員会の中でやっていくということなのかなと思っています。もしこういう事がやりたい人を、例えば地域おこし協力隊で「じゃあやってみようか」なんていう人が居ればなんですけども。

○佐藤洋樹市長

地域おこし協力隊もなかなか難しいというか、希望する人がそんなに前ほど多くなっているの。

○軽部賢教育長

条件もありますよね。地域外の人が地域の事が熟知してできるかということもあるので、なかなかマッチングができるかどうか。

○佐藤洋樹市長

なんで地域おこし協力隊の人を入れようとしているんですか。

○軽部賢教育長

最初は、地域の事を知っているコーディネーターと、他から入ってきて発想力というか、そういうものがうまくマッチすると、新しい動きが出てくるのかなと期待感で入れたんですけども。

○佐藤洋樹市長

なかなか何をしたらいいのか、分からなくなるような感じもしたんですけど。

○軽部賢教育長

ちょっと多岐にわたっているの。やりたいことがいっぱいあるんだけど、焦点化ならないというか。さっきの部活動にしても、やっぱり学校だけじゃなくて地域の力も借りてやっていく、そういった過程の中で将来的には地域で受け皿をつくって、国でいっている様な地域移行みたいなものに段階的に進めていくみたいな一つのステップにもなるのかなと。いろんな事を欲張りすぎる感じはするんですが、これからやっていかなければならないような課題をコンソーシアムの中で盛り込んだということで、こんなふうになってしまったというか。

○佐藤洋樹市長

はい、まずこれからも実現に向けて検討していただいて。

時間もあれですが、皆さんの方から何かありますか、特によろしいですか。

特に無いようでありましたら、今日の協議二点については以上で終了とさせていただきたいと思
います、ありがとうございました。

4 その他

5 閉 会 午後5時10分